



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ウィリアム・ジェイムズにおける悪の問題
Author(s)	堀, 雅彦; Hori, M
Citation	基督教学, 38, 21-22
Issue Date	2003-06-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46666
Type	journal article
File Information	38_21-22.pdf



ウィリアム・ジェイムズ における悪の問題

堀 雅彦

本発表は、一八九〇年から一九一〇年までを中心活躍したアメリカの哲学者、ウィリアム・ジェイムズの宗教思想について論じるものである。特に悪をめぐる彼の議論に注目し、心理学者として出発した彼が、悪に対する人々の心理的態度の差異への注目から、ついには人間とともに悪と戦う「有限な神」という觀念の積極的意義を主張するに至った事情を明らかにしたい。

ジェイムズはまず、『宗教的経験の諸相』において、悪に対する人々の態度を「健やかな心」と「病める魂」という対比のもとに大きく二分する。この対比は、心理学的類型という形を取りつつも、当時のアメリカにおけ

る宗教意識の葛藤状況を鋭く描写するものであった。すなわち、建国以来アメリカの風土に深く根づいてきたプロテスタンティズムの悲觀的宗教性と、それからの離脱として十九世紀後半から勢いを増してきた超越主義やマインド・キュアの樂觀的宗教性とのせめぎあい、そこで前景化されているのである。前者が一般に神と人との懸隔を強調し、この世における様々な悪を根本的には人間の罪深さを象徴するものと見なすのに対して、後者は、この世に存在するものすべては本質的に善であり、また神的であるとして、必要なはそのような世界の真相を覆い隠すあらゆる偏見を取り除くことだと主張する。

ジェイムズ自身は、『諸相』ではこれら両陣営に対して、それぞれの利点と難点を認めている。健やかな心の宗教が促している無限の生命との一体感には、科学的唯物論の前進とともに死物と化しつつある自然の世界との交流を再生する新たな「祈り」としての積極的意義が認められると彼は言う。しかしながら、悪への対応をめぐる倫理的態度の点から言えば、過酷な自由競争のもとで進化論的粉飾とともに正当化される弱肉強食の論理に抗

し、なお弱者の苦しみに寄り添おうとする病める魂の宗教としてのキリスト教の価値を、われわれは決して軽く見積もるべきではないとも彼は訴えている。

こうして『諸相』を上梓した後のジェイムズは、基本的には樂觀主義的、また神人即一的な「健やかな心」の宗教性を受け容れながらも、この世の現実を覆う様々な悪や苦悩を視野から排除しないような宗教的世界観の可能性を模索することになる。とりわけ注目すべきは、彼が悪を思弁的に超克しようとする神義論の一切に背を向け、むしろ実践的な克服の対象としての悪に対峙する人々の意欲を支えるものとして、神の概念を Casting としていく点である。すなわち、神を無限にして完全な存在ではなく、われわれ人間と同様、善と悪の混在する不完全な世界のただ中に住み、われわれに協力を呼びかけて世界を完成に導こうとしている有限で途上の存在と見なすことが、選ばれるべき唯一の立場ではないにせよ、実践的観点に立つ普通人の宗教のありようとしては大いに妥当性を有すると主張するのである。

このような見解は、神学的には安易な選択と見えるか

もしれないが、科学主義的な無神論や宗教無用論の跋扈する当時のアメリカにあつて、伝統的な神の概念を切り崩しつつも、あらゆる地上的共同体の壁を超えた全人類的な連帯を呼びかける存在としての神の存在意義をなお訴えるものとして、一定の意義を認められてよいだろう。また、これが後のデューイにおいて、永続的人間共同体への道徳的責任を説く民主主義の哲学へと意図的に世俗化される形で継承され、アメリカの政治思想の一つの哲学的基盤を形づくるに至った点は、今日的に見て極めて興味深い事柄だと言えよう。